

モンゴル国紀行

IV. かの国のお茶の記

江戸ソバリエ協会 理事長
ほしひかる

昨年の秋のことです。同じく全麵協の皆さんたちと韓国を訪ねたとき、かの国ではお茶類を飲む習慣がないことに気づきました。街にカフェとか、喫茶店がほとんど見当たらず、またレストランで食事した後の「お茶」の類が供されることは皆無でした。

これまで4回ほど韓国を訪れていたのですが、いずれも2泊3日程度の滞在でしたので、韓国のお茶の慣習にまで目が向かなかったのです。それが昨秋はゆっくりと1週間ほど滞在していたため、分かったわけです。現在、世界中の人が茶(緑茶・烏龍茶・紅茶・他)かコーヒーを、「お茶」として愛飲していますが、そういう文化をもたない国もあるということを知りました。文化人類学者の石毛直道によりますと、東南アジア、東欧、オセアニア、アフリカの人たちは本来、お茶を飲む習慣がないとのことですが、そこに韓国が入っていようとは思いませんでしたので、驚きました。



《草原にて悠々と茶を喫す》

作家の遠藤周作や赤瀬川原平は、気持の安寧とお茶を喫つすることの関係を述べていますが、そもそも、人間の飲茶の風習というのは中国の唐代に始まったことはよく知られています。茶関係の本によりますと、唐の茶は7世紀半ばに朝鮮半島へ、9世紀には日本列島へ、同じころウイグル族、チベット族へと伝わり、そして12世紀のチンギス・ハンはヨーロッパ遠征時にも茶を携行していたといいます。ところが韓国は14世紀に儒教の国になって喫茶を禁止したため茶文化が廃れ、今もそのままだというのです。したがって、現在は中国、日本、チベット、モンゴルが、茶文化の先進圏といえるようです。この後の17世紀

半ば以降から、アジアの茶の影響をうけて、ヨーロッパで紅茶・珈琲文化圏が生まれますので、アジアは第一次茶の文化圏、欧米が第二次茶の文化圏といったところでしょうか。

そこで気になっていたのが、モンゴルのお茶《スーテイツァイ》です。

幸い、この度モンゴル国へ旅行する機会が訪れました。一行の目的は当然、日本の蕎麦文化の普及です。会場は首都ウランバートル市から北西へ約 400 km 離れたバヤン・アグト郡のにある広大な「ナーダム広場」です。モンゴル民族の夏の祭典といわれるナーダムで、競馬、ブフ、弓射が行われますが、その一角で全麵協の有志約 40 名が蕎麦打ちを見せて、蕎麦を振る舞い、またお好み焼きも振る舞うことになりました。

私は、合間を縫って通訳のヤンジカさんに、モンゴルのお茶に興味をもっていること、ここで飲ませてくれる店はあるのかを尋ねたところ、店を見つけて、案内してくれました。ですが、今日は野外ということで臨時的にティーバックにクリーブを入れたものでした。

もともと唐代の茶というのは固形茶だったそうで、それが明代から現在のよ
うな葉茶になったのです。ですから最澄や空海が日本に伝えたのは固形茶になります。高知県大豊町で現在も生産されている《碁石茶》が往時の原型を守っているといわれています。《碁石茶》の作り方は、1)茶葉を蒸した後、蓆を敷いて約 1 週間拵けておいて、黴付をして発酵させる。2)それから数週間ほど桶に漬け込む。「黴付け」と「漬け込み」を経ると植物乳酸菌が生まれる。3)発酵が終わり固まった茶葉は 3~4 cm に切り分けて蓆に並べ、約 3 日天日で干すのだと、友人の茶の専門家から教わりながら、飲んだことがあります。



《碁石茶》



《大豊町碁石茶協同組合 HP より》

ヤンジカさんも、「本当の《スーテイツァイ》は碁石茶(固形茶)を削って煮出し、牛や駱駝などの乳を 2-5%加えて塩で味を調える」と教えてくれ、さらに「お茶はモンゴル国の旧正月には欠かせない飲み物。普通の日でも 1 日 20 ちかくは飲みます。家に来てくれれば飲ませてあげるけど」とおっしゃってくれましたが、私も碁石茶は飲んだことがありましたので、「だいたいどんなものか分かりまし

た」とご返事したところでした。モンゴル人は乳そのものは飲みませんが、このように《スーティツァイ》として温めた乳や、チーズなどの乳製品は食べます。それは乳を飲むとお腹がゴロゴロする蒙古斑族共通の乳糖不耐性のためだと聞いています。そういえば、昔の日本人もミルクを飲めない人がかなりいました。

この後、ウランバートルに戻りますと、各レストランでモンゴルの茶を頂く機会がありました。とくにホテル SHANGRI-LA 内には、立派なゲルが設けてあって、《スーティツァイ》を頂くところを形だけですが写真に撮れるようになっていて、本物はレストランで頂きました。写真のようにゲル内にチンギス・ハンの肖像が飾られていますから、手元の器には“蒼き狼”が携帯してたという茶が入っているかのようなようでした。



《ヤンジカさんと》

《スーティツァイ》

最後の日に、在モンゴル日本国大使館の井川原特命全権大使を表敬訪問した際、大使はこの度の天皇皇后両陛下ご訪問を機にモンゴル国は流れが変わってきたように感じるとおっしゃっていました。それは伝統の《スーティツァイ》のように蒼き狼を敬愛しながらも、新しきモンゴル国を創ろうという気運がここにきて興ろうとしているということなのでしょう。

モンゴル国の国民的詩人といわれている D・ナツァグドルジ(1906-37)に「わが故郷」という詩があります。

匈奴の時代よりわが祖先の故郷
蒼きモンゴルの時代に力強く興りし国
古より年々歳々慣れ親しみし故郷
今では新しきモンゴルの赤旗に覆われし国
これぞわが生まれし故郷 モンゴルの麗しき国

(詩の一部)

この詩にも伝統と革新の気持がよく現れ出ているように、他国者の私にすら思えました。

以上

[参考]

遠藤周作『変わるものと変わらぬもの』（文春文庫）

赤瀬川原平『ごちそう探検隊』（ちくま文庫）

岡田和行「ダシドルジーン・ナツァグドルジと『わが故郷』」